

考えることを楽しみ、力を発揮する子どもの育成を目指して

～1年生「読むこと」を中心とした実践から～

長岡市立表町小学校 川井 美代子

1 はじめに

当校の校内研修テーマは「考えることを楽しみ、力を発揮する子どもの育成」である。これは、県小教研の目指す「考える力」を育てることと通じる。国語における、「考えることを楽しむ」姿とは、言葉による表現を味わい、面白さや楽しさを感じることでと考えている。また、「力を発揮する」姿とは、基礎的な力を確実に身につけ、他者の考えを正確に理解していくこと、そして仲間と意見交換しながら、そのよさに気づき、自分の中に取り入れていくことである。

それらの姿を実現するため、以下の3点を取組の柱として、実践を行った。

- ①語彙を広げ、言語感覚を豊かにする学習活動を意図的に、年間を通して取り入れていく。
- ②子どもの意識の流れを大切にし、単元を貫く言語活動を設定する。
- ③子ども同士のかかわりを取り入れた授業展開、単元構成を工夫する。

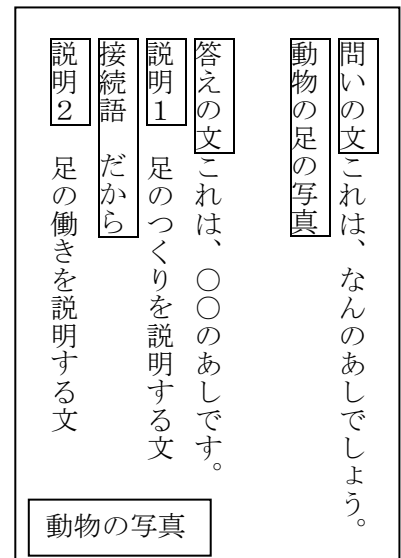
こうした実践を、年間を通して行っていくことで、子どもたちの「考える力」は伸びていくものと考え、実践を行った。

2 実践の実際(1年生「いきもののあし」)

(1) 実践の内容

第1学年国語上(学校図書)の、「いきもののあし」の実践を行った。「いきもののあし」は、1年生で最初に出会う説明文教材である。アヒル、ライオン、シマウマの足を拡大した写真が提示され、問いの文と答えの文、そしてその説明という繰り返りで構成されている。説明をしている部分は、足のつくりを表す文とそのつくりによってどのような動きをすることができるのかを表す文である。子どもの興味関心の高い動物を取り上げていること、「これは、なんのあしでしょう。」という文からクイズ的な面白さがあることなど、入門期の子どもにとって取り掛かりやすい教材である。

教材の面白さを大切に、読むことと書くことをつなげていくことで、読みの力を付けていくとともに、目的を持ち楽しんで読み進めてほしいと考え、以下の手立てを行った。



【 教材文の構成 】

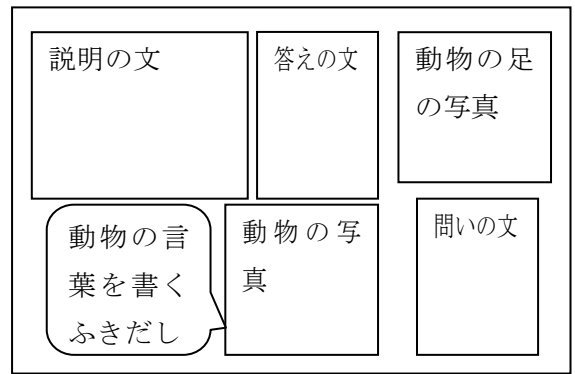
①書かれていることから想像をし、読み取る場面

○動物の動きの動作化と交流

足の働きを説明する文に注目させ、動作化することでその意味をとらえさせた。一斉に動作化をし、自分で考えた動きを表現した後、全体の前で代表者が動作化を行った。その際、「なりきりインタビュー」と称して、その動物になったつもりで感想を話す活動を行った。

○ふきだしの記入

学習は、ワークシートを用いて進めていった。ワークシートには、教科書に掲載されている写真を印刷して貼り、本文を視写させた。動作化を行い、全体で読みを確かめた後に動物の写真部分にふきだし型のカードに動物になりきって考えたことを記入した。記入した後のワークシートは、完成した子どもから黒板に掲示するようにし、友達作品を自由に閲覧できるようにした。



【 ワークシートの構成 】

②自分で調べて書く場面

本単元の目標として、自分で調べたい動物を決め、オリジナルのページを作ることを提案した。教材文で学んだ文章の構成が、そのまま自分のページ作りにつながっていくよう、本文の読み取りに使ったワークシートと同じ形式のものを使用した。また、教室後方に、動物について書かれた本を複数用意し、いつでも手に取ることができるようにした。

(2) 授業の実際

①書かれていることから想像をし、読み取る場面

動作化を行うことで、言葉の意味に着目して読む姿が増えていった。以下は、実際の子どもの様子である。

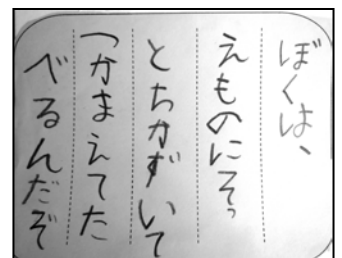
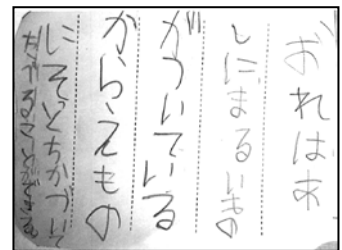
【A児の姿から】

ライオンについて書かれた部分の動作化を行ったときである。動作化を始めようとしたときに、A児が「先生、裸足になってもいいですか？」と聞いてきた。どうかが尋ねると、A児は「だって、靴は固くて、裸足だとやわらかいから」と答えた。この姿は、「あしのうらにはやわらかいものがついています。」という文について実際に「やわらかい」とはどういうことを考え、判断している姿だと言える。靴を履いたままの状態では、十分に動作化できないと考えたのであろう。このA児の姿から、約半数の子どもが裸足になり、動作化を行うことになった。

動作化によって見えるようになった個人の読みを、全体で共有し交流していくことで、考えが広まり、個人の読みも深まっていった。また、一斉に動作化を行った場合、周りの動きに影響され、子どもの動きは変化していった。それだけでは、読みに関係しているとは言えないが、全体の前で話したり、ふきだしに書いたりすることで、なぜそう動いたのかを考えることになり、動作化と教科書の叙述とをつないで考えることができた。

ふきだしに記入する場面では、読んだことを生かし、動物になりきってふきだしを書く子どもが多くなった。

「ライオンになったつもりで、足のことを自慢しよう」と言って、ワークシートのふきだしを書かせた。すると、「ぼくは、えのものにそっとちかづいて、つかまえてたべるんだぞ。」といった記述や「あしにまるいものがついてるから、えものにそっとちかづいてたべる。」といった記述が出てきた。この「つかまえる」「たべる」といった言葉は、教材文中には出てきていない言葉である。動作化によって獲物に近づいた後のことまで想像することができていると言える。



【 子どもの書いたふきだし 】

②自分で調べて書く場面

本文の読み取りを終えた後、自分の好きな動物の体について調べ、教材の構成を使ってオリジナルページを作った。単元の初めから参考図書を教室に置いていたので、どの動物について調べるかは、比較的容易に決められていた。

教材の基本的な構成である、「これは、なんの〇〇でしょう。」という問いの文と、「これは、〇〇の〇〇です。」という答えの文は、全員が使って書くことができた。動物の体のつくりを説明する文についても、参考図書から見つけるのが容易であったためか、全員が自分の力で書き進めることができていた。オリジナルページの製作は、子どもにとって楽しみであったらしく、参考図書をじっと読み続ける子どもや、2ページ目の製作にとりかかる子もいた。

しかし、接続詞「だから」を使って文をまとめることが出来るようにするため、読み取りの授業の際に強調して取り上げる必要があった。例えば、ワークシートの中に「だから」の言葉だけを抜き出させるような形にするなど、音読の際に強調して読むようなことがあげられるだろう。



【子どもの書いたオリジナルページ】

3 終わりに

実践を進めていく中で、子どもが言葉による表現を楽しむ姿を見ることができた。その中で、「今までの経験や知識とつなぎ合わせて読む」、「書かれていることを正確に読み取る」、「自分なりに工夫して書く」などの姿が現れたことは、「考える力」の表れだと考える。これらの姿は、1時間の授業の中でのみ達成されるものではなく、単元構成を工夫していくことにより、あるいは一年間の学習の中で積み重ねられていくものであると考えられる。これからも、子どもが力を積み重ね、発揮できるように、課題や単元構成の工夫をしていきたい。